

評

39窃盗団

過酷な現実 笑いに昇華



どう向き合えばいいのか分からない時、取りあえず距離を置く。ひとことなら、そんな態度でごまかせる。だが、身近なひとだったら、それもいかない。押田眞将監督がダウン症の弟を主人公にした「39窃盗団」は、監督が弟やダウン症に対する積年の思いを込めた作品となっている。しかも、野球でたどるなら、危険球になりかねないコースに球を投げてきた。

主人公は、ダウン症の兄キヨタカ、発達障害の弟ヒロシ、二人と「ひまわり学級」で一緒だった和代。仕事がない人が、詐欺師に「キヨタカは罪を犯してもムシヨに行かなくていい」とだまされて、空き巣行脚をす

るきわどい話だ。「39」は、心神喪失者などの刑罰について定めた刑法39条から取っている。

脚本も手がけた監督は、俳優ではない2人の弟、清剛と大をキヨタカとヒロシ役に。時折見せる清剛の笑顔は魅力的で、大と息の合ったやりとりを見せる。天然ボケの和代を巧みに演じた山田キヌヲも光る。加えて、この作品の秀逸さは、ドキュメンタリーではなく、コメディ―仕立てにした点にある。

キヨタカは、ドラゴンボールを見逃さないために放送日以外にも8チャンネルを監視。黄色い巨人の帽子をかぶり続け、盗みに入ると木彫りの熊などがラタタばかり持って来る。いわばボケ役だ。一方、「あにい」と突っ込むヒロシも頼りなく、詐欺師に実家をだまし取られてしまう。和代は父親にエッチな仕事をさせられている。

押田監督は、過酷な現実を映画の中で安易に解決せず、笑いに昇華してありのままを見せる。「ひとこと」の観客に、どんな球を投げるのか。監督が選んだのは、頭を狙った直球ではなく、打者をのけぞらせてストライクになるカーブだったのだ。(西田健作)

17日から各地で順次公開。